

3.11

あの日から

東日本

東日本大震災・原発事故から

10年

大震災

復興とその先の未来を

主催／福島市

- ◆日時／2021年3月7日(日)〈13時30分〜15時20分〉
- ◆会場／桜の聖母短期大学 マリアンホール講堂

復興



福島市長 木幡 浩

## ◆市長あいさつ

皆さま、本日はお忙しい中、出席をいただき、誠にありがとうございます。どうぞいります。

間もなく、あの東日本大震災から丸十年を迎えます。

改めて、犠牲となられた多くの方々に、追悼と鎮魂の祈りを捧げますとともに、被災された全ての方々に、心から御見舞い申し上げます。

私たちの心るさと福島市は、大震災と原発事故によって未曾有の被害を受けました。

とりわけ原発事故による放射能被害は想像だにしたこともなく、健康不安や風評被害などこれまでにはない経験に苦しましました。

先の見えない不安の中、国内外から温かいご支援や励ましの声を頂きました。何物にも代えがたく、私たちが勇気づけてくれました。

改めて、深く感謝を申し上げます。

世界初の全市的な除染作業は、七年の歳月を費やして完了し、市内の空間線量も低減、安心して生活できる環境に回復いたしました。

東北中央自動車道などインフラ整備は格段に進み、観光客についても、震災前の水準にあと一步のところまで回復するなど、復興は着実に進んできています。

一方、放射能への不安、風評被害は根強く存在し、今なお二千人を超える市民が全国各地で避難生活を送っています。原子炉の廃炉も遠い先で、復興は道半ばであります。

大震災後も、台風十九号、コナホ、そして福島県沖地震

と、立て続けに災難に見舞われました。

しかし、私たちは決して挫けません。あの震災を乗り越えてきた自負があります。

私たちは、いただいたご支援を復興の原動力に換え、相次ぐ試練を変革のバネとしながら、福島市の新ステージに向け、一丸となって力強く前進してまいります。

私たちは、あの災害から、市民相互のコミュニケーション、高齢者や障がい者への配慮、人と人の絆と多様な連携など、大切な教訓を身をもって学びました。

大震災から十年、「福島」と「復興」に注目が集まる中で、これらの教訓を生かしながら、「福島」の名を冠する県都の責務として、福島圏はもとより、福島県全体の発展に貢献します。

さらに、災害の記憶と教訓を次世代へ引き継ぎながら、復興

の先を見据えたまちづくりを進め、県内市町村の復興・創生にも貢献してまいります。

この四月からは、第二期復興・創生期間として新たな復興創生のステージが始まります。

復興の次に創生があるので、はたなく、市民との共創により新たな次元を目指す創生を進めてこそ、復興は達成できます。

大震災以降、主体的に復興やまちづくりに関わるという市民、特に若い世代の動きが顕著になってきました。それを産・学・官が連携してサポートする。市民社会が進化してきています。

私たちは、市民が励まし合い力を合わせ、国内外の方々との連携を図りながら、真の復興に取り組みます。

健康管理や風評払拭など残された課題への対応はもとより、安全・安心なまちづくり、子育て環境の充実、健都ふくしまの創造などの取組を重点的に

進めます。

さらに、中心市街地に広域的な拠点機能を集積しつつ、福島らしい文化の香り漂う風格ある県都を実現し、更なる地域社会のグレードアップを図ります。

市民だれもが「本場に住んで良かった」と誇れるまちにする。

そして、世界から支援をいただいていたまちから、災害が多発する世界の方々の励みとなるような世界にエールを送るまちを目指してまいります。

本日は、二部構成で、追悼・鎮魂と未来を見据えるイベントにいたします。本市唯一の名誉市民古閑裕而さんの音楽と詩人と合奏一さんの詩で、福島市らしく文化的に皆さんの心に訴え、そして市内外で活躍する四人の方々に未来を語っていただきます。

コナホ禍ゆえ十分な時間がとれず、大変申し訳ないのです

# 徳島

が会場の皆さまには、本日のイベントから、自らの3・11の意味を問い直すとともに、未来への希望と意欲を膨らませ、それぞれの立場で福島の未来づくりに参画いただければ幸いです。

結びに、本イベントにご出演の皆さま、三浦尚之アドバイ

ザーや市議会の皆さまを始め、本イベント開催にご尽力いただいたすべての皆さまに心より御礼を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

皆さん、大震災という土台にしっかりと足をつけ、未来に向けて、前進してまいります！



- ◆ オープニングムービー
- ◆ 開会・黙とう
- ◆ 市長あいさつ
- ◆ 詩の朗読「夜明けに」  
詩 人：和合 亮一
- ◆ 独唱「長崎の鐘」  
作 詞：サトウハチロー  
作 曲：古関 裕而
- ◆ ソプラノ：阿部絵美子
- ◆ ピアノ：富山 律子
- ◆ 「希望の鐘」の鳴鐘

総合同会 福島「ミチノチ」放送  
FMPOCO 国分久美恵  
音楽総括 福島市音楽文化 三浦 尚之  
総合アドバイザー

## ◆ 詩の朗読

## 夜明けに

作／和合亮一

友よ 星の足跡だ 雲のあしおとだ  
眼指す先に風の巣があつて  
鳥になつたまま戻つてはこない  
君に祈るのだ  
十年、静かな朝にどうか夜明けを  
友よ静かな木もれ日か  
静かに降り積む雪の音が  
目覚めた後の静かな夜明けが  
玄関に並んだ新しい靴が  
ふと押し黙る夕食が  
変わっていく町が悲しい時もある  
あの日、たくさんの暮らしが  
命が水平線の向こうへと  
連れ去られ風に鳥になつたまま  
戻らない人がある。  
あの日、二度の火があがり  
白と黒の煙、やがて底知れない  
闇が降りてきて  
生まれ育つた街にも家にも  
まだずっと戻ることが  
出来ない人がある。  
怒りと悲しみを握りしめ  
拳を固くした歳月から  
とても少しずつゆっくり  
新しい指をしなやかに開いて  
遥か彼方  
静かに照らされる大地へ  
若々しい友よ  
君はどんな種子を  
蒔きたいのだろう  
春を待つ風の手のひらに  
笑ったり肩を叩き合ったり  
共に涙したり青春の日々が  
一個一個の粒になつて深呼吸して  
力を満たすようにして一番小さな  
ふるさとの顔をして眠っている  
季節はめぐる宇宙と生きる

福島に生きる無数の星の一つひとつ  
わたしと君の夜明けだ  
光は光をあきらめない  
わたしはわたしを君は君を  
友よ種子まく人  
きみの目は澄んでいる  
種子まく人、君の胸は熱い  
種子まく人、君の腕は青空に輝く  
種子まく人、君の足は  
世界中のケヤキの樹だ  
蒔こう朝に明日に風に  
雲の足あとに はるかかあなたに祈る  
友よ  
夜明け前に君の影を追いかけて  
海辺をどこまでも歩いていく  
夢を見る  
雲のあしあとを追いかけて  
風にさらわれてしまった人よ  
世の中は今も吹きさらしのままで  
あの日、君が懸命に助けた人々は  
それでも手を握り合つて  
空に明星を探している  
明るくなつていく水平線を  
見つめていると 真っ直ぐな  
その眼差しを思い出す  
時代の寒さに曲げられてしまひそうに  
なつても、あのまつすすべな線には  
わたしたちの心がある。  
波に風にその姿を探す  
はるか真ん中から光り出すとき  
見つけたと思う。  
目が覚めると十年が過ぎていた  
友よ君はいつまでも若い  
あの日のままで  
寂しい新しい美しい朝が来るのか  
夜明けはどこから赤くなり始めるのか

君の流した涙から  
それはどこから  
叶えたかつた夢  
雲の心の真ん中から  
宇宙は疑っている  
星の海を渡る白い鳥を  
寒い風と電信柱と電線を  
吠えている遠くの家の犬を  
果たして夜は開けるのだろうか  
しかし私は疑わない  
澄んでいく空の青さを  
一日への大気の扉を  
黙礼する  
願う前に祈られている  
祈る前に願われている  
闇の中、道を見失わないための灯火を  
闇の中、眠れぬ人に寄りそつ  
静けさをこの目に  
闇の中、優しい吐息と静かな風の歌を  
闇の中、ざわめく草原の  
真っ白い沈黙を  
この耳に風のさなか  
奪られないこの命を  
凍える夜、愛する人を  
包みこむ温もりを  
この手に、海、山、空の広大無辺の眩きを  
険しい道を突き進むもつとする力を  
この足に、歩き続けられる強さを  
誰かと手を握る力を  
この心に、生まれたばかりの光を  
どこまでも深い夜の海よ  
風と雲よ銀河を背負いし船よ  
いざ美しい帆を母なる海原へ  
掲げよ明けない夜は無い  
はるか空が染まる  
新しいきみの頬か

燃えあがるかのようにだ  
雲を見つめていると  
かなた青々と沈黙する  
静かな夜の先で  
第三コーナーのあたり  
星が追いかけてくる  
約束する  
追いかせないこと  
はるか彼方から  
赤のバトン  
しかと受け継ぐ  
夜明けを駆け抜ける  
光の走者よ  
朝焼けのなか風になつて  
鳥になつて  
夜明けを駆け抜ける  
光の走者よ  
朝焼けのなか風になつて  
鳥になつて  
夜明けを駆け抜ける  
光の走者よ  
朝焼けのなか風になつて  
鳥になつて  
約束する  
遥か彼方から  
赤のバトンをしかと  
受け継ぐ  
友よ  
星のあしおとだ  
雲の足跡だ

## 第2部

トークイベント  
独唱

# 復興から新たなまちづくりへの挑戦・発信

◆テーマ「復興から新たなまちづくりへの挑戦・発信」

コーディネーター……市長 木幡 浩  
出演者……室屋義秀 RUU、和合亮一、西内みなみ

◆独唱「栄冠は君に輝く」

歌詞……加賀大介 作曲……古関裕而  
テノール……今尾 滋 ピアノ……富山律子

◆閉会

チーム福島で

「世界にエールを送る」

まちづくり

自身の役割に目覚め、意を新たに頑張り続けた十年

市長 それでは、第二部を始めさせていただきます。東日本大震災は、私たちに大きな被害を与えただけでなく、さまざまな影響を及ぼしました。人生だけでなく人生観も変わったという方も多いのではないで



●コーディネーター／福島市長：木幡 浩

室屋

僕は大震災の二年前からエアレースに初参戦して、頑張っていたんです。ご当時は、自分だけで勝とうとしていたんです。二〇一〇年にレースが終わり、翌年が大震災。あの頃は、本当にみんなで助け合っていましたよ。その中で、僕の考え方がすごく変わりました。地域のコミュニケーションも含めて、周りの人に支えられていたことを

しようか。かく言う私自身も飯館村の実家をなくしました。懸命に復興に取り組み友人たちの姿を見て自分もと決意し、縁あって復興庁福島復興局長という立場で福島に戻り、今日に至っております。本日は、まさ大震災が皆様の人生にどんな影響を与えたかお話しただきたいと思います。



●出演者／エアレース・パイロット 室屋義秀

和合

僕は、教師としての初任地が浜通りでしたので、この十年は、浜通りと福島の間を巡らすことになりました。とにかく震災後は、詩を書いて、書いて、書き続けた十年でした。今、大震災を知らない子どもたちが小学校一年生、二年生になっています。その子どもたちに何を伝えていくの

実感したんです。その支えがあったからこそ、今日までエアレースを続けてこられたと思っています。

か。これが私たちの、もう一つの語り合いの場所になっていくように感じています。本当の取り組みはこれからだと思っています。

RUU 十年前のことは、とても鮮明に覚えています。生まれてから一度も感じたことのない恐怖や不安に襲われました。当時、私は十九歳で、福島市内にダンススタジオを立ち上げて三年目。続けていくのは難しいと思ったのですが、放射能の問題で子どもたちが外で運動したり、遊ぶことができなくなった時、ダンスは室内でできると思って再開を決めました。私は3・11を経験したからこそ、強く生きられるし、今があると思っています。これからもずっと前を見て、高みを目指して頑張っていくかと思っています。

西内

私は、まさにこのリアンホールで被災しました。翌日の卒業式のリハーサルで集まっていた二〇〇名以上の学生たちと外に避難すると、隣接する学童

保育所から子どもたちが叫び声をあげて出てきました。雪の降る中、自分たちも不安で仕方のない学生たちが恐怖と寒さに震えている子どもたちを懸命に守る姿に、本学の「愛と奉仕の精神がしっかりと学生たちに宿っていることを実感しました。ほとんどの学生が保護者のもとに帰ることができたのが、翌日の昼過ぎで、あれほど濃密な時間を過ごしたことはありません。災害や試練の中でも他者を大切に思う「愛と奉仕の精神」があれば、どんなことでも乗り越えられるとその時、確信しました。私はそのことをここで、未来を創る学生たちに伝え続けています。



●出演者／桜の聖母短期大学学長 西内みなみ

## 復興から新たなまちづくりへの挑戦・発信

県都・福島市と世界がダイレクトにつながっていく

市長 3・11は、福島という地にも大きなダメージを与えました。福島がカタカナや



ローマ字で表されたりした一方で全国、世界中に知られる名前になりました。次は県都として福島市は、どのような復興創成を目指すべきかお聞きします。

西内

福島市に必要とされるのは、生まれ育った町で自分自身の価値観を大切に生活し、この町を豊かにできるという営みの実現だと思います。実は二〇一八年八月、福島市内にある五つの高等教育機関と福島市、福島市商工会議所、企業で、地方創成の中心的な役割を担う若い人たちを育てる「福島市産官学連携プラットフォーム事業」を立ち上げました。四つのプロジェクトチームがあり、十八もの取り組みをしております。その結果、文部科学省の「令和二年度私立大学等改革総合支援事業」に採択されました。福島市は、さまざまな試練にさら

されていますが、私たち一人ひとりが置かれた立場で、希望を持って、最善を尽くしていけば、私たちが灯す地方創成というのは、この先も輝き続けていくと確信しています。

RUU

私は、「どこに住んでもいても夢は叶うから絶対にあきらめないこと」を、私の背中を見せながら伝えたいです。福島市は、子どもが主役の町になってほしいと願っています。勉強、運動、音楽、ダンスなど、その子の得意なことや個性を生かして、みんなが夢を追えるような環境を作ってあげたいです。

和合

「福島を世界に発信する」という言葉をたくさん聞きます。大事なテーマです。世界に発信していくためには、子どもたちに世界感覚をきちんと教えることだと思っています。RUUさんも室屋さんも世界で活



●出演者／詩人：和合亮一

躍されています。私も時々、世界のいろいろな町へ行って、福島は世界とダイレクトにつながれることを実感しています。コロナ禍でオンラインの便利さにも気づきました。古いものを残し、新しいものを取り入れながら、どう世界とつながって行くか。そのことを子どもたちに伝えるという意味で、語り合う時が来ているのではないかと思います。

室屋

大震災の後、二〇一一年六月には海外に行っていました。最初の一年は、パスポートを見て、「おう！生

きているのか」みたいになりアクションが結構ありました。最近では、あまり言われなくなりましたが、風評はまだまだ残っています。海外で福島と言つと、ほとんどの人は知っています。ハンディキャップもあるとは思いますが、次世代は、有名になった福島を使って他人より二歩ぐらい先に進んで行けばいいと思っています。うまく活用すれば活躍のフィールドは、世界に広がっていきます。

次の一歩は、チャレンジする仕掛けと風土づくり

市長

それでは、最後の質問です。今日の提言に皆さんは、どのような形で関わっていきたいか。また、自身の目標をここで話していただくことで再び市民の皆さんと「チーム福島」として一つになって行け

たらと思っています。よろしくお願いたします。

**室屋** 二〇二二年からエアレースが復活する予定です。そこで勝ちたいと思っています。年間総合優勝という世界一は、本当に難しい戦いになるので、ぜひパワーアップしたチーム福島のお力を借りたいと思っています。それと今、高校生がふくしまスカイパークで操縦訓練をしていて今夏、国家資格に挑戦します。技術学校とのコラボで福島県産の飛行機を作ろうというプロジェクトも動いています。こうしたすべての力を結集させて、再度世界一を目指したいと思っています。

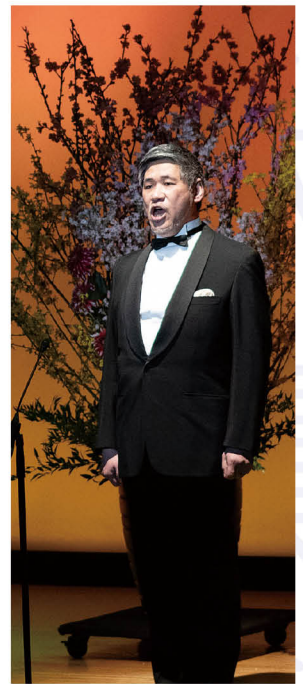
**和合** この十年の間に「震災文学」という言葉が生まれました。もつ少しわかりやすくした「福島文学」を教育や社会に定着できるような仕組みを作りたいと思っています。これまでも福島稲荷神社で創作神楽「未来神楽」を奉納したり、「未来神楽」という能楽の台本も書いてきました。福

島には優秀な方々がたくさんいますので、全国あるいは全世界から福島に足を運んでくださるようなものを、チーム福島で整えていきたいと思っています。また、若者の発表の場がないので、福島に行けば物を書いたり、表現活動ができるだけでなく、表現者を受け止めて見てくれる人がいる。面白いことをしているという場にしていきたい。例えば、和合さんが何かやっている時に、Ruuさんがすごい踊りをしていて、上を見たら飛行機が飛んでいる…みたいな面白いことをぜひ、これからの十年で分かち合ひまじょう。

**Ruu** 大震災があつてから、負けても負けても諦めないという気持ちがあつてく



●出演者/ダンサー・振付師:Ruu



●出演者/テノール:今尾 滋  
独唱「栄冠は君に輝く」

強くなりました。「福島から世界へ」と言い続けて、二〇一六年と二〇一七年と二度、日本人初の世界一になりました。翌年、全米で放送されたテレビ番組に出演した時のパフォーマンスには、「福島は大丈夫」というメッセージを込めました。これからも世界で福島を発信し続けたいと思っています。私自身は、演出家を目指しています。見てくださる方が、パワーをもらつて明日からまた頑張ろうって思っていたら嬉しいようなエントナーテインメントを届けられるように頑張りますので、よろしくお願いたします。

**西内** 私は普段、学生に幸せな人生って「誰かが必要とすること」、そして「誰かから必要とされること」と教えています。桜の聖母短期大

学は創立以来、大震災、コロナ禍においても学びとつながりをとても大切にしています。逆にこうした危機的な状況だからこそ、震災時に誰かのために生きる」という人間の本質に立ち返った私たちは、きつと大きく成長することができると確信しています。今、最も辛い体験をしているのは子どもや若者です。でも、今日のイベントのようには逆境であればあるほど、夢を大きく抱いて世界に挑戦していく方々と出会えば、彼らにも夢と希望が必ず種として時かれまです。私たちは、次世代の利益を大切にする必要があります。パンデミックという深刻な危機に直面した今こそ、それが希望になることを震災で

学びました。福島からエールとして世界に、このことを伝えていきたいと思っています。

**市長** 皆さんのお話を伺って思うのは、3・11最大の教訓が「支え合う力」ではなかったかということ。コロナ禍も励まし合い、支え合つてこそ乗り越えられるだろうと思います。もう一つは考え方です。マイナスだった福島のイメージをプラスにして、福島の良いところをさらに磨きチャレンジしていく。福島をそういう風土にしていくことです。まさに今、福島市は、「世界にエールを送るまちづくりを進めています。これは、私たちが常に世界から応援してもらっている。福島が良くなることは、世界にも貢献することになるんだ」という気持ちで頑張っているという願いが込められています。

ぜひチーム福島で支え合いながら進めていきましょう。本日は、ありがとうございました。



**福島市**  
FUKUSHIMA CITY

 **YouTube** 本編動画配信中！

🔍 **【3月7日開催】震災復興イベント**

